慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	富樫考
Sub Title	Togashi
Author	安藤, 美穂(Ando, Miho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

富樫考

安藤　美穂

一、はじめに

安宅の関を守る富樫といえば、謡曲「安宅」や歌舞伎「勧進帳」によって周知の人物であろう。謡曲の富樫が単なる関守でしかなかったにも関わらず、歌舞伎では義経一行と知りつつも敢えて見逃し関を通す「情」を備えた人物として格段に好感度が増す。富樫像の変化は、時代の変遷を象徴しているとも言える。しかし、富樫にアレンジを加えたのは歌舞伎のみならず、謡曲自体もまた先行するテキストの富樫像を変化させていた。従来、謡曲以前の富樫に関して問題とされる機会がほとんどなかったように思われる。そこで本稿では、特に『義経記』と幸若舞曲に描かれる富樫像の分析を通して、元来の富樫譚がどのような背景をもとに成立したのか、その語りの諸相を探りたい。

二、富樫をめぐるテキスト

まず、義経北国落ち譚の中で富樫譚がどのように展開されているか、諸テキストの内容を確認しておきたい。富樫が登場する北国落ち譚テキストとしては、『義経記』（巻七）、幸若舞曲「富樫」「笈さかし」、中尊寺蔵『義経北国落絵巻』、謡曲「安宅」「笈捜」などが挙げられる。本稿では特に『義経記』、幸若舞曲、謡曲「安宅」に注目し、その相互関係についても考察を試みたい。(1)

『義経記』(2)において富樫が登場するのは、巻七「平泉寺ご見物の事」の後半部である。富樫は直接鎌倉からの命を受けてはいないが義経を待ち構えているという噂があり、弁慶が単身館に乗り込む。それを見咎めた下人に対し弁慶が狼藉を働くが、富樫自身は特に咎めることはない。それどころか「東大寺の勧進山伏」と名乗る弁慶に多大な勧進を行う。つまり一行は富樫館で特別な危機に遭遇するわけではなく、よって北国落ち譚全般を通じて存在する逃避行の緊張感は欠如している。

幸若舞曲における富樫譚は二曲に分断されたかたちとなっている。『義経記』ではさして長くなかったものが、舞曲では二曲にわたる長大なものとなり内容が大きく膨らんでいる。特にそれは「富樫」(3)において顕著である。まず、はじめに安宅の松において、土地の童があらわれ、道案内をすると共に、富樫が鎌倉の命で判官一行を捕らえようとしている旨が説明される。そして、その松原には殺された山伏の首が大量にかかっているのである。さらに、一人で富樫館に赴いた弁慶は富樫に糾問され、両者の間の問答、弁慶の勧進帳読み上げという『義経記』にはなかった危機が設定されている。この内容拡大部分からは『義経記』巻七「三の口の関通り給ふ事」が連想される。『義経記』では何度か関所

通過譚が語られるが、中でも特に愛発山の麓にある三の口の関通過はまさに難関であった。関にさしかかる前に一行は不思議な男に会い道筋を教えられ、さらに関における山伏の糾問が地の文によって予告されている。また、『義経記』にはなく舞曲に展開されている富樫と弁慶の問答の要素は、三の口の関に確認できるものである。このように、『義経記』「三の口の関通り給ふ事」には舞曲「富樫」と共通する要素が多く確認されるのである。幸若舞曲は判官物の世界を取り扱い多数の曲を残しているが、北国落ち譚を扱う曲は、「富樫」と「笈捜」の二曲のみである。よって、演出上の集約作業が行われ、『義経記』の三の口の関の語りを富樫譚に組み込んだのではないかと考えられる。

「富樫」は弁慶の勧進帳読み上げという最大のクライマックスとともに曲を終える。弁慶の勧めに応じて富樫が勧進を行う場面は、「笈さかし」[4]の冒頭で語られている。「富樫」の続きのかたちだが、こちらは特に余計な要素を付加することなく『義経記』とほぼ同じ内容を語る。富樫の語りが二曲に分割されてしまっているために、両曲の連作性が指摘されてきた。[5]ただこのように話が盛り上がったところで曲を終え、その続きを別曲の冒頭に付すという方法は舞曲の他作品[6]にも見られるものであり、決して特別な例というわけではない。さらに、この曲が連作性の意図を持って作られたものなら、続けて同時に上演されてもよさそうなものだが、記録上[7]その例は見られない。二曲の成立状況や相関性について明確な答えを出すことは難しいが、「笈さかし」冒頭部は『義経記』における富樫譚―勧進を行う富樫―を舞曲側が無視しきれなかったために残したと解釈するのが妥当であるように思う。

さて、謡曲「安宅」[8]については、信光作のものとされているが現状でははっきりとした確証はない。既に寛正六（一四六五）年に将軍院参の際の観世演能として上演されているので（『親元日記』）、それ以前には成立していたと考えられる。もちろん記録上では舞曲より早い成立ということになる。しかし、仮にそうであったとして、舞曲側が「安宅」

の影響下に「富樫」「笈さかし」を製作したと断じることは難しいように思う。「安宅」の内容を追ってみると、義経の北国落ち譚を安宅という一つの場に集約したものであると言える。先に確認した『義経記』三の口の関における関通過譚や、六道寺の渡しの場面で語られる弁慶の義経打擲、舞曲「富樫」に見られる勧進帳読み上げ、さらに延年の舞など、様々な要素が盛り込まれている。この北国落ち譚の編集は実に巧みであって、舞曲よりも格段に集約性が高いものである。「安宅」で読み上げられる勧進帳が舞曲のダイジェスト版とも言うべき内容であることも考えると、むしろ謡曲の作者が『義経記』や舞曲などを踏まえて、「安宅」を作ったと解釈する方が分かりやすいのではないだろうか。

三、文覚譚との関わり

以上、諸テキストに展開される富樫譚について大まかに確認してみたわけだが、ここで『平家物語』における文覚との類似性について触れておきたい。院の御所法住寺殿に神護寺再興の勧進を乞うため単独で乗り込む文覚については、覚一本では巻五「勧進帳」「文覚被流」において語られる。折しも御遊の最中、延臣たちの管弦に始まり、朗詠、風俗催馬楽、今様が披露される中、突如乱入した文覚が大声で勧進帳を読み上げたため一座の空気は白け、院は激怒した。文覚は取り押さえようとした判官資行をあしらい、勧進帳を左手に刀を右手に暴れまわるが、ついに院北面の安藤武者右宗に捕えられる。この件は『玉葉』[9]にも確認されることから史実であるが、『平家物語』では大いに脚色して語られている。

文覚譚については既に詳細な研究がなされている。山下宏明氏[10]・渡辺貞麿氏[11]は四部合戦状本に展開される文覚譚に語りの原初形態を認め、そこに聖の管理を想定された。特に渡辺氏は四部本を古態とする立場から、もともと文覚説話は

「勧進ヒジリの勧進という営みの中から発生した」ものであるとし、増補系の長門本・延慶本・盛衰記に見られる浄土教的要素について「堂棟の修造を勧進するヒジリたちに語られていた文覚発心譚は、ヒジリたちに語られていたが故に、やがて念仏勧進のヒジリたちに引きつがれ、念仏信仰の色彩を濃厚にもったかたちで定着した」とされている。また佐伯真一氏[12]は物語としての整理・加工をなされていない段階での文覚譚に見られる勧進聖のイメージに着目しておられる。つまり、『平家物語』に収められた文覚譚の元来の語りには勧進聖の関与が考えられる。

このような語り手たちを背景とする文覚譚と富樫譚の類似点は特に『義経記』に顕著であり、弁慶が富樫館に乗り込むのは三月三日の宴の最中であった。不意に現れて勧進を募った弁慶の大音声に「くわんけんのてうしもすなはちそれ」、当の富樫も「きけんあしく」なかなか出てこない。唐突に現れ、宴の空気を壊す弁慶の姿は文覚と酷似し、文覚譚との影響関係は否定できないであろう。しかし、『義経記』の問題点は勧進帳が存在していないことである。阿部泰郎氏[13]は文覚の乱入は芸能の「推参」の典型であるとし、同時に管弦の音を打ち破る文覚の「大音声」によって、「表象の次元までも含めた中世の世俗的秩序を侵犯するような行為」になったとする。小峯和明氏[14]も触れているように、「勧進聖」たる文覚の絶対的シンボルである勧進帳は読み上げられることにより「生きた音声として蘇生し」、管弦の音に象徴される王権の秩序を破壊するものとして効果的な力を発するのである。勧進帳がない以上、弁慶は文覚のように勧進聖として決定的な印象を与えるには至らず、したがって文覚譚との関わりは話型の類似を指摘するに留まらざるを得ない。そこに文覚譚を管理していたと思われる語り手の投影をはっきりと見出すことは難しいのである。つまり、文覚譚にならって意図的に富樫譚が造形されたというよりは、元来別に存在した富樫語りに文覚の話型が利用されたと考えたい。

一方、舞曲「富樫」は勧進帳読み上げの要素はあるものの、『義経記』のように宴が邪魔される設定はなく、館の描写には武装表現が目立つ。これは富樫が完全に義経の敵としての役割を与えられているためであろう。そして舞曲における勧進帳は、文覚のようにシンボリックな働きを持つものではなく、あくまでも富樫の疑いを解くための手段として利用されるに過ぎない。そもそも勧進帳自体、弁慶の頭の中で考え出された架空の産物なのである。先に検討したように舞曲が富樫譚を加工している点を考え合わせると、富樫譚はもともと『義経記』に近いかたちで存在しており、勧進帳読み上げもまた舞曲による付加的要素と捉えるのが妥当なのではないだろうか。弁慶の勧進帳読み上げは、ヨミモノという芸能として十分に成立するものである。現に幸若舞曲には「文覚」[15]という曲が存在し、そこでも勧進帳が読み上げられる。それが幸若の芸の中で見せ所であり聞かせ所だったのだろう。こう考えると、舞曲が「三の口の関」の語りを取り込んでいるにも関わらず、なぜ舞台をあえて富樫館にしたのかという点も理解できる。つまり、ヨミモノであるところの勧進帳を披露できるのは、関守のいない三の口の関より、文覚譚と結びつく要素が存在する富樫館である必要があった。しかし、『義経記』のかたちの富樫では、面白さもなく、勧進帳を読む必要性も生まれてこない。そこで舞曲は富樫の語りに三の口の関の要素をかぶせ、勧進帳の読み上げが行われるような危機的状況を設定したのではないか。

『義経記』も舞曲も何らかのかたちで文覚譚との関わりを指摘できるわけだが、それならばなぜ敢えてそれが富樫譚に結び付けられるのか、という疑問点が生ずる。そこで注目されるのが、勧進をする者として描かれる富樫である。

四、富樫語りの可能性

『義経記』、舞曲において、富樫とは勧進を行う者である。特に『義経記』の場合はその性格が顕著であり、一族の勧

進は盛大なものである。

上ほんのきぬ五十ひき、女はうのかたよりさいしやうさんけのためにとて、しろきはかま一こし、やつはなにいたるかゝみひとつ、さていゑの子らうとう、女はうたち、ひてうにいたるまで、思ひ〳〵にくわんしんに入。そうしてみやうちやうにつく人百五十人。

関の通過が主題となる謡曲・歌舞伎に同様の場面は見られないものの、それでも一行に酒をふるまう富樫の姿に、多少かたちは変わりつつも一貫したイメージの継承がうかがわれる。あらかじめ富樫と勧進が結び付けられた語りが存在していて、そのために文覚譚を利用できる状況が発生したという可能性はないだろうか。すなわち、文覚譚が結びつく前に存在していた富樫語りというものをここで想定してみたいのである。

藤島秀隆氏[16]は、主に『義経記』、舞曲「富樫」を中心に、加賀の国の語りについて信仰的側面から考察を進めておられる。『義経記』、「富樫」には白山信仰の影響が見えるのに対し、同じ話題を取り扱っていても『義経北国落絵巻』や「安宅」ではむしろ熊野信仰の要素が強い。特に、『義経記』と白山信仰との関わりは密接で、道中白山本宮系四社のうち三社に参詣していること、登場してくる加賀武士団の白山信仰を確認できることなどから、

「北国落ち」物語の加賀国の条は、加賀武士団（特に富樫党）と本宮系三社に語りの重点を置かずにはいられなかったと思われる。

と指摘された。特に、『義経記』の富樫館の条は、富樫氏の崇敬が確認できる金剣宮に義経一行が前夜通夜している語りと併せて、

『義経記』の富樫館の条は、弁慶と熊野信仰を殊更強調している訳ではない。ここは金剣宮の御利益によって弁慶

に富樫がいとも簡単に屈服する語りと考えてよいのではあるまいか。

と考察しておられる。

ここで『義経記』に登場する林・富樫・井上という三人の加賀武士について確認しておく。この三者の組み合わせは、『平家物語』『源平盛衰記』から見られるものである。ただ、『平家』諸本では、主に林氏、続いて富樫氏の登場が多く、井上氏はさほど重きを置かれていない。一方、『義経記』では、林氏は名前が出てくるだけで、井上・富樫の記事に重点が置かれている。もともと加賀武士団の中で最も優勢であったのは、林氏であった。しかし、林氏は承久の乱で院方へ与したために、衰退することとなる。変わって、台頭してきたのが富樫一族である。藤島氏はこうした時代背景から、『義経記』の富樫語りは、富樫氏台頭期―つまり、鎌倉末期から室町初期―の事情を反映しているものと指摘される。

さて、藤島氏のおっしゃるように白山信仰の影響の強い加賀の国の語りに、やはり白山を崇敬する加賀武士団が登場し、それが時代背景を反映して富樫氏と井上氏に代表されるという事情は納得できるとして、富樫譚に勧進が結びつく点に関してはどのように解釈すべきか。実際に富樫氏が東大寺の勧進に参加していたことを示す記録は、管見の限り確認できない。中ノ堂一信氏[17]によれば、当時東大寺の勧進などに協力していた最大の檀那とは朝廷と鎌倉幕府であった。当初は西国を朝廷、東国を幕府の管轄とする認識があったようで、文治四年（一一八八）三月幕府は東国に勧進の命を下しているが、建久五年（一一九四）五月には、その呼びかけが諸国の守護にまで拡大している[18]。つまり、富樫譚の中で東大寺の勧進に素直に応じている富樫はこの頼朝の命に従っているとも受け取れる。もちろん、この命令が下された際、富樫氏は加賀の国において傑出した力を持っていたわけではなく、同族の林氏の配下に甘んじていたはずである。

実際富樫氏が加賀国守護に任じられたのは、建武二年（一三三五）、南北朝初期の富樫高家の頃[19]のことであった。しかし、それ以前に富樫一族が守護と名乗っていた形跡が見られるのである。『白山荘厳講中記録』[20]元応二年（一三二〇）三月八日条に、「守護神拝、富樫次郎泰明」とある。泰明は高家の父にあたる。また、正中二年（一三二五）四月五日条では、白山本宮と金剣宮との抗争合戦の際、「富樫次郎家明」という人物が仲介し双方和解した。その家明の名に「時守護」という注が見られる。また、富樫泰明が頼朝より守護に任じられたという伝も残っているらしい。[21]

富樫一族は承久の乱の後、林氏の没落に乗じて急速に勢力を伸長した家柄である。もと林氏の派流であった故に、はやくから自らの家柄を権威付けようという意図を持っていたとしても不思議ではない。富樫語り―守護である証に勧進を行う富樫―が自らの権威を高めようとする富樫氏側の主張とあいまって存在していた可能性を考えたい。そして、その語りが富樫氏と深い関わりのあった白山信仰を通じて義経伝承に結びつき、『義経記』のような富樫譚が生じたのではないだろうか。

五、みまんだう

ここで幸若舞曲に目を向けてみると、「富樫」は幸若が作為を加えて内容を膨らませたものであるのに対し、「笈さかし」はほぼ『義経記』の語りに近い。即ち、勧進をする富樫―もとの富樫語りに近いもの―を語り、内容もほぼ『義経記』と同じである。「笈さかし」は直接『義経記』を参照したとも考えられるが、両者を比べてみると多少の相違が見られることから、『義経記』とは別個に伝承世界に接していた可能性もある。両テキストの相違点を検討することで、それぞれの伝承摂取の姿勢、独自性が浮かび上がってくると考えられる。

そこで、まず舞曲「笈さかし」に見られる「みまんだう」という場所に注目してみたい。弁慶は一人単独で富樫館へ赴いたため、一行と待ち合わせの場所を予め定めておき、合流することになっている。『義経記』では、「みやのこし」で待つように弁慶が言ったにも関わらず、弁慶がいざそこへ行ってみると、一行はいなかった。そして、結局「大野の湊」で合流することになっている。一方、「笈さかし」では、「みまんだう」で待つようにという弁慶の指示に従い一行はそこにいるので、無事に合流ができる。そして、その夜は「みやのこしさらたけの明神」で通夜をするという流れである。つまり、ここで『義経記』と「笈さかし」には場所の違いが生じている。

舞曲の「みまんだう」とは、御馬神社（金沢市久安一丁目）のことと考えられる。正徳四年（一七一四）に書かれたとされる御馬神社の縁起は次の通りである。

久安御馬神社略縁起[22]

当社御馬神社ハ延喜式内石川郡十社の一社にして、当国にての旧社なり、其創立等の来歴・祭神の古伝等ハ旧記・縁起も伝来せす、殊に国内の兵乱打続き、神官・社人も久しく断絶して宮守もなく星霜を経しかハ、社地ハ神木生ひ茂り、松風ならて音つるゝものなく、神歴を問ふへき術なかりけり、今倩按に、社号の御馬ハ郷名にて、源順の和名抄に載たる古郷にて、上古以来御馬の郷御馬河の里に鎮座し給へり、御馬河ハ今もミま川と呼へり、此河の河端に社地ありて、今ハ久安村の村地に属せり、故に久安の御馬神社と称す、邑人なと久安のミま堂と俗称す、ミまどうハ御馬神社の意なりといふ、故に河名も或ハミまどう川、又誤て二万堂川と呼へり、其近辺なる橋をハ二万堂の橋とも呼へり、後世神社と仏堂と混淆するより、此神社も御馬堂と称し、御馬をハ二まんと呼ひ誤りたるものなり、文治年中に、源義経等山伏の姿と成、北陸道より奥州へ下られし時、御馬神社の社地に休らひ、社前なる松か

枝に笈を懸て休息ありしとなん、右の松をハ義経の笈掛松と称し神木ありしか枯木と成、延宝八年六月寺社所より伐採方を命せられ、浅野川稲荷天道院より伐取たり、天道院ハ往昔御馬神社の別当なり、富樫介泰明の四男家明ハ久安の地辺を領し久安に館を構へ爰に居住す、家明か子孫相継て此館に居たり、故に邑人久安殿と称せり、富樫泰高の時御馬神社へ稲荷明神を勧請せられ、修験者をして神社の社僧となし神勤せしめらる、是天道院の鼻祖なり、然るに元和二年に天道院金沢へ移住し、稲荷大明神を味噌倉町稲荷橋の辺へ遷座し、慶安四年に再ひ浅野川の川縁へ移転し、久安の本社御馬神社をハ兼勤なしたり、今古来伝承する趣を略記して御馬神社の縁起とする処如件、

正徳四年午八月　　稲荷天道院

また、『石川県神社誌』[23]では、御馬神社について次のような考察を付している。

御馬ハ地名ニテ、日本霊異記ニ、越前国加賀郡ノ部内御馬河里ト載タルハ、加賀建国以前ノ旧談ニテ、弘仁十四年、越前国江沼・加賀ニ郡ヲ割加賀国トシ、加賀郡ヲ割テ石川郡ヲ置タル、故ニ類聚倭名鈔ニ、石川郡御馬郷トアリ、御馬河ハ今二万堂川ト称スレト、宝暦・明和頃ノ記録ニハ、三万堂川、或ハ見満川トアリ、此頃マテハ古唱ノ残リタルナラン、久安村ハ川ノ辺ニテ、則社モ水辺ニアリ、二万堂ハ御馬堂ノ誤唱ニテ、往古本地堂ナト有シ遺称カ、加賀古跡考ニ、長享二年ノ頃、富樫泰高、久安村ニ館ヲ造営シ居住ス、富樫氏ハ代々稲荷ヲ崇敬スルヲ以、御馬神社ニ稲荷ヲ勧請ス、故ニ今モ久安稲荷と称スト、但旧記縁起伝来セサル故ニ来由不詳ト雖、地所ノ証跡ヲ以テ確定スヘキカ

これによれば、御馬神社は『延喜式』神名帳に載る「御馬神社」に比定される神社であるが、近世以前の古記録が存在しない。一向一揆の兵火にかかり衰退したらしいので、その際に記録類が失われたのかもしれない。ともかくも、中世

の「みまんだう」については類推の域を出ないが、「久安のミま堂」と呼ばれていたことから、いずれかの段階で仏堂が合祀され信仰を集めていたのだろう。

注目すべきは、「みまんだう」の所在する久安が富樫氏と関わりの深い地であるということである。富樫氏は守護所を兼ねた富樫館を現野々市町付近に構えたと伝えられ、そこからは中世期の遺構も発掘されている。しかし、先に「白山荘厳講中記録」正中三年条に名の見えた富樫家明が、『富樫系図』[24]では久安氏の祖となっており、久安にも富樫一族が居住していた。ただ家明に始まる久安氏は、四代目の満成で絶えており、その後久安と富樫氏の関わりは不明である。社伝では、富樫泰高が久安に居を構えたとする。泰高は一五世紀後半の人物で、応永・文明の乱では富樫政親と共に東軍に与し、西軍に属した一族の幸千代と争った。やがて、幸千代を退け覇権を握った政親が、長享二年（一四八八）一向一揆に攻められ高尾城で自害する。泰高はその後名目的に擁立され、その子孫が後を継いだが、天正二年（一五七四）泰俊が一向一揆に討たれ富樫氏は滅亡した。御馬神社の伝承では、泰高が久安に屋敷を構え、稲荷を当地に勧請したのを長享年間のこととする。これは政親が滅ぼされ、富樫氏の勢力が減じたまさにその頃のことであるが、これが史実であるのか否か確証はない。ただ、泰高が稲荷を勧請した際に修験を社僧としたという点に留意したい。それが社伝を記した天道院の鼻祖だという。[25] 天道院は確かに当山派修験の寺院として確認されるが、しかし当時から御馬神社の別当であったのならば、むざむざ衰退させたまま放っておくわけもないだろう。もともと「みまんだう」には修験が関与していたが、一向一揆のあおりをうけて衰退し、江戸時代初期の段階で管理を任されたのが、同じく修験の系譜を引く天道院なのではないかと思う。天道院が延宝八年に伐採したという松は義経伝承を持った笈かけの松であり、修験と関わる義経伝承がこの地に存在していたことが想像される。

「みまんだう」の問題をめぐって、もう一つ注目されることは、傍に川が流れているということである。ここで「笈さかし」が加賀の国をどのようなルートで通過しているか見てみると、

安宅―富樫館―みまんだう―みやのこしさらたけの明神

となっている。「みやのこしさらたけの明神」は、犀川下流、宮の腰付近にある大野湊神社のことで、「みまんだう」からはだいぶ距離がある。しかし、「みまんだう」付近に流れていた伏見川は犀川に合流しており、つまり川を下れば宮の腰までは簡単に行くことができる。舞曲で「みまんだう」の名が見えるのは、この水上ルートを反映したものと言えるのではないだろうか。一方、『義経記』では

金剣宮―林六郎居館―富樫館―宮の腰―大野湊

というルートを辿り、さらに弁慶は宮の腰まで馬で送られているので、陸路を使用していることは一目瞭然である。つまり、両テキストに生じる場所の違いは、交通手段の相違によるものではないかと想像されるのである。

六、大野庄湊

大野庄湊[26]とは、犀川河口の宮腰津、大野川河口の大野湊の総称で、共に臨川寺領大野庄に属していたために、このような呼称が生じた。二つの港は非常に近接していたが、別個の港津集落を形成していたようである。しかし、中世においては宮腰の名が諸記録に散見し、大野庄湊という呼称で呼ばれても実質上は宮腰津を指している場合が多かったとされる。宮腰津は、金沢市内を流れる伏見川、安原川の内陸水運と結びつき、かつ中世加賀の国の交通路の結節点であった。また、一方で日本海沿岸の諸地域や畿内各地との遠隔地交易の中継港としての役割も果たしていた。

また、文学世界にも宮の腰は登場する。幸若舞曲「信太」[27]では、主人公小太郎が京都五条の商人の手から四国・西国を経て北陸道に売られてゆく。

わかさのを浜越前のつるか三國のみなと加賀の國宮のこしへそ売たりける物の哀は多けれ共宮のこしにて留たり

この地で小太郎の売買は成立したものと思われる。その後、小太郎は農作業に従事するが足手まといになり、追い出されて乞食のように諸国を放浪することになる。また、説経節「をぐり」[28]では、照天姫が諸国を売られてゆく場面に宮腰の名が見える。

よしはら、さまたけ、りんかうし、宮の腰にも、買うて行く、宮の腰の商人が、価が増さば売れよとて、加賀の国とかや本折小松へ買ふて行く

どちらも諸国の港を廻り売られてゆく者が主人公で、中世の商業における人身売買の実状を示しているが、その港の中に宮腰の名が挙げられていることからも、当地が交易上重要な拠点であったことが明らかである。つまり、宮腰津は内陸水運の面でも、また遠隔地を取引対象とした日本海交易の面でも、隆盛を誇った地であると言える。そして、その様相を端的に捉え語っているのが、「笈さかし」ではないかと考える。即ち、「みまんだう」を提示することで、久安から伏見川・犀川を経て宮腰津へ到達する内陸水運の知識を反映させ、宮腰から能登国へ船出をするという設定に日本海交易拠点の当地の性格を生かしていると言える。

また、特に「宮腰」でなく、「みやのこしさらたけの明神」と宗教性を強調している点も興味深い。「みやのこしさらたけの明神」＝大野湊神社は、『延喜式』神名帳に既に名が見え、中世には大野庄の総鎮守として佐那武社と呼ばれ、近世には佐那武大明神、あるいは所在地から「寺中さらたけ明神」などとも呼ばれた。長寛元年に原形が成立したとさ

れる『白山之記』[29]に、白山九所小神の一として「佐那武大野庄在之」と見え、白山の有力末社であった。同書の増補部分には、「佐那武宮腰」と見え、「国之八社」の一つに挙げられている。即ち白山信仰との結びつきが強い。「みまんだう」に見られる修験の要素と併せて、舞曲が修験の語りを取り入れていることはほぼ間違いないといってよいであろう。さらに、そこに詳細な水上交通の知識が反映されている点は興味深い。

一方、『義経記』では、特に大野湊神社に触れず、宮腰―大野湊と二つの港を列挙している。宮の腰で合流するはずが大野湊まで行かねばならない意図は分からず、かなり不自然なかたちでルートを辿っていると言えるが、この後一行は大野湊から竹橋に向かいそのまま倶利伽羅峠を越える。この辺りの陸上ルートは『源平盛衰記』[30]巻二十九「平家砥波志雄二手事」に記されている。それによれば、木曽義仲追討の平家軍は二手に分かれた。搦手は「志雄山」へ向かい、その軍勢は

能登路白生ヲ打過テ、日角見・室尾・青崎・大野・徳蔵・宮腰マテツヽキタリ

とある。追手はこれに対して倶利伽羅山へ向かい、都合七万余騎が

加賀国井上・津幡・荒井・閑野・竹橋・大庭・崎田・森本マテ連タリ

とある。宮腰から大野へ北上し、青崎を経ると『源平盛衰記』では志雄に向かってしまい、これは能登街道の道筋になる。竹橋から倶利伽羅へ至る北陸本道とは少々異なる。つまり、『義経記』は一見『源平盛衰記』にあるような陸上ルートを辿っているようでも、実はわざわざ大野庄湊へ立ち寄っている感を受ける。つまり、単純に北陸本道を通過しているわけではない。

このルートは室町期の流通路を反映しているという指摘[31]がある。では、なぜ『義経記』は宮の腰と大野湊という二つ

の湊の名を不自然なかたちで列挙するのだろうか。そこで注目したいのが、白山宮水引神人の身分を持つ紺掻の分布地に、宮腰・大野の名が見えることである。『三宮古記』「近年水引神人沙汰進分事」[32]には、「宮腰代成用途二百文　大野分別代□」とある。彼らは白山の勢力下にあったものだが、彼らのような者が、義経伝承に参加し、交易ルートの知識を反映させていたのではないだろうか。そして、紺掻の存在を考えるとき、それは文覚につながる要素ともなる。文覚が義朝の髑髏を示して頼朝に挙兵を促した後日談として語られる『平家物語』「紺掻之沙汰」（覚一本では巻十二）では、実はその髑髏は偽物で本物は紺掻の男が密かに隠していたのだという。文覚は改めて頼朝の命で髑髏を受け取りに行き、ここに文覚と紺掻の接触が見られる[33]。白山信仰を媒介にして紺掻が伝承に参加したために、富樫語りに文覚譚のアレンジが施され、『義経記』に見られるような富樫譚が成立したのではないだろうか。

在地の武士の語り、職能集団の語りが白山信仰によって結集された結果、富樫譚が成立し、さらにそれが修験によって語り伝えられ、舞々などの芸能集団に取り入れられていくといった様相がここに想定されるのである。

注

（1）『北国落絵巻』（『言語と文芸』昭和四四年七月に翻刻。）、謡曲「笈捜」（田中充校『未刊謡曲集』古典文庫　昭和四〇年）については、両テキストとも『義経記』・舞曲・謡曲「安宅」の影響下に後代製作されたものと判断し、今回の考察の対象からは外した。

（2）『義経記』については巻七において古態を有するとされる第一系列のうち、中でも古い成立とされる天理本を基本テキストとして使用した。（〈今西實編『義経双紙』三弥井書店　昭和六三年）

（3）「富樫」は、室町末期の詞章を残すとされる大頭流の正本・大頭左兵衛本（天理図書館善本叢書和書之部第七十四巻『舞の本大頭本

二』昭和六〇年）を使用。尚、「富樫」という曲名に関しては、「勧進帳」「安宅」とも称され、呼称が一定していない曲である。最も古い上演記録は天正四年（一五七六）三月六日の『言継卿記』であるが、これには「アタカ」とある。しかし、舞曲で安宅の地はほとんど問題にならず、おそらく謡曲「安宅」が既に寛正六年（一四六五）には上演されているので、言継が呼称を混同したのであろうと思われる。諸本を見ると、三つの呼称が入り乱れているが、「安宅」とするものは後題簽であったり、近世に書かれたもののみであるから、「安宅」という呼称は不適切であろう。「勧進帳」は歌舞伎の「勧進帳」以前に既に呼称が成立しており、さらに記録上最も多く確認される名なので、あるいはもともとこの呼称こそが原題だった可能性もある。現に、文禄本はこれが曲名である。ただ、歌舞伎があまりに有名であるために混同しやすいことと、大頭左兵衛本が「富樫」という曲名を記し、ある程度の正当性はあると思われるので、本稿では「富樫」で統一する。

（4）「笈さかし」においても(3)と同じく大頭左兵衛本を使用。

（5）室木弥太郎『語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』風間書房　昭和四十五年

（6）同様の趣向のものとして曾我物の「夜討曾我」「十番切」が挙げられる。「夜討曾我」は兄弟が祐経・工藤内を討ち果たすところで曲を終え、「十番切」はその続きを語る。

（7）「富樫」（「アタカ」「勧進帳」と記すものも含む）の上演例は、天正四年『言継卿記』『御湯殿の上の日記』、天正七・八・九・一五・一六年『家忠日記』、慶長五年『言経卿記』、慶長九年『時慶卿記』の九例が確認される。一方「笈さかし」は、天正四・十五・十七・文禄二年と四例で、「富樫」の方が圧倒的に多く、かなり人気のあった曲ではないかと思われる。市古貞次『中世文学年表』東京大学出版会　一九九八年参照。

（8）新潮日本古典集成『謡曲集』上　小学館　昭和五八年

（9）『玉葉』承安十三年四月二十九日条「高尾上人文覚参二院中一、眼前所二望千石庄一、依レ無二許容一、吐二種々悪言一、殆放二言朝家一云々、仍北面輩承レ仰、搦二捕之一、凌礫給二検非違使一云々。是又天魔之所為也」（國書刊行会編『玉葉』第一　名著刊行会　平成五年）

（10）山下宏明「『平家物語』における文覚像」（『紀要』（名大教養）10　一九六六年二月）

（11）渡辺貞麿「『平家』文覚譚考―勧進聖と念仏聖―」（『大谷学報』59―4　一九八〇年二月）

(12) 佐伯真一「勧進聖と説話—或は「説話とかたり」」（水原一編『平家物語　説話と語り』有精堂出版　一九九四年所収）

(13) 阿部泰郎「推参考」「文覚私註」（『聖者の推参』名古屋大学出版会　二〇〇一年一一月所収）

(14) 小峯和明「文覚の勧進帳をめぐる」（『軍記文学の系譜と展開』汲古書院　一九九八年所収）

(15) 荒木繁氏は、「文覚」の勧進帳読みが「富樫」に比して不自然な設定であることから、「文覚」は「富樫」の二番煎じであろうとされている（『幸若舞』2　平凡社　一九八三年）。「文覚」の上演記録初出は慶長九年であり、新しい作か。

(16) 藤島秀隆「義経北国落ち伝説考—『義経記』・『幸若舞曲』の伝承—」（『中世説話・物語の研究』桜楓社　昭和六〇年・村上学編『義経記・曾我物語』国書刊行会　平成五年所収）

(17) 中ノ堂一信「中世的「勧進」の形成過程」（『中世の権力と民衆』創元社　昭和四五年所収）、「東大寺大勧進職の成立—「俊乗房重源」像の再検討—」（『日本史研究』152）、「中世的勧進の展開」（『芸能史研究』62　一九七八年七月）

(18) 『吾妻鏡』文治四年三月十日条「所詮於二東国分一者。仰二地頭等一。可レ令レ致二沙汰一之由被二仰遣一。」・建久五年五月二十九日条「被レ下二御書於諸国守護人一。可レ致レ勧二進国中一之由云々。」（新訂増補国史大系32『吾妻鏡』前編　吉川弘文館　平成十二年）

(19) 建武二年九月二十七日足利尊氏下文（写　四天王寺蔵「如意宝珠御修法日記」紙背）より知られる。（『金沢市史』資料編1　古代中世一　平成十年）

(20) 日本海文化叢書第四巻『白山史料集』上　金沢県図書館協会　昭和五十四年。『白山荘厳講中記録』は、白山比咩神社蔵。承元三年から弘治元年に至る下白山本宮に関する重大事件を掲載。荘厳講をひらく際講衆に発した廻状を裏返しにしたものを綴った冊子に書かれる。事後断簡片紙を拾い集めて順序立てたものらしい。筆者不明。

(21) 日本古典文学大系『義経記』岡見正雄氏の注による。

(22) 『神道大系』神社編33所収「加賀諸神社縁起」より。「加賀諸神社縁起」は明治二十九年九月森田平次編纂。尚、引用に際して旧字体は適宜当用漢字に改めた。

(23) 『神道大系』神社編33所収「石川縣神社誌」より。明治初年に新政府が府県に命じて延喜式内社並びに式外社あるいは府藩県崇敬社を調査、録上させたのに基づくが、直接には明治七年六月、教部省の「特選神名牒」纂定にあたって石川県が作成して提出した調書によるものとされる。

(24) 泰明の子に、高家・泰信・家明（久安）・家善（押野）あり。高家の子孫が守護職を継承。久安の家明の子孫は、家成・家永と続き、四代目の満成は幼少から足利将軍家の近習として仕えたが、応永二十六年足利義持によって殺害されている。（『金沢市史』資料編2　中世二　平成十三年所収の尊経閣文庫所蔵『新集百家譜』「富樫系図」参照）

(25) 金沢市並木町天道寺のことか。天道寺は加能越三州の山伏寺一八〇ヶ所を統括する山伏頭五カ寺の一で、触下に加賀・越中の当山派二二カ寺をもつ。現浅野川神社。

(26) 以下、大野庄湊については、浅香年木『中世北陸の社会と信仰』法政大学出版局　一九八八年　に導かれるところが多かった。

(27) 大頭左兵衛本にはなし。よって文禄年間の奥書を持ち、成立年代が明らかなものとしては最古の文禄本より引用。（天理図書館善本双書和書之部第四十七巻『舞の本文禄本上』昭和五四年）

(28) 新日本古典文学大系90『古浄瑠璃　説教集』岩波書店　一九九九年

(29) 『神道大系』神社編33所収。奥書より、正応四年五月一日・永和四年六月晦日・応永十六年五月十九日と書写を重ねたものを、永享十一年六月九日に加賀国温谷護法寺において、右筆の定成が書写したものであることが分かる。日置謙氏は『白山史料集成』解説（昭和十年六月）の中で、増補部分と考えられている後半部は定成が追書したものとされている。

(30) 渥美かをる解説『源平盛衰記　慶長古活字版』6　勉誠社　昭和五三年

(31) 日本歴史地名大系30『石川県の地名』一九七九年

(32) 『白山史料集』上（注20）より

(33) 紺掻に関しては、喜田貞吉「青屋考」（『民族と歴史』2―1　一九一九年七月）に始まり、山本尚友「新青屋考」（『京都部落史研究所紀要』4　一九八四年）、丹生谷哲一「青屋賤視の歴史的背景」（『部落問題研究』98　一九八九年四月）などの先行研究があるが、特に『平家物語』の紺掻に言及したものに春日井京子「「紺掻之沙汰」の生成と展開―覚一本を中心に―」（『平家物語の成立』一九九七年三月）がある。